

一般演題

1. ^{123}I -IMP の集積を認めた Meningeal melanoma の 1 例

村田晃一郎 岩田 雅巳
(北里研メディカルセ病院・放)
高野 尚治 斉藤 元良 (同・脳外)
大部 誠 (同・病理)

脳腫瘍のなかでも稀とされる原発性頭蓋内悪性黒色腫を経験したため、その画像所見を中心に報告する。症例は、頭痛にて発症した 34 歳男性である。脳神経学的に異常はなく、血液・尿一般検査、腫瘍関連マーカーも正常であった。頭部 CT 検査では、中頭蓋窩に接する 3×3 cm の高吸収領域を認め、周囲に脳浮腫を伴っており、造影効果は軽微であった。MRI では、T1 強調像にて高輝度を呈し、T2 強調像にて腫瘍部分が無信号の特徴的な像を呈していた。また、冠状断像では中頭蓋窩に広基性に接し脳実質を上方に圧排しており、髄膜関連の腫瘍と考えられた。

^{123}I -IMP による脳血流シンチグラムでは、腫瘍部分に強い取り込みを認め、15 分像よりも 2 時間像にて集積が強くなっていた。手術所見では薄い被腹を有する半球状の腫瘍で中頭蓋底でシート状にクモ膜下腔に移行し、脳溝に沿って浸潤していた。病理では、脳軟膜原発の悪性黒色腫であった。

2. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -SQ30217 による心筋血流シンチグラフィ—特に ^{201}Tl との比較において—

橋本 順 久保 敦司 塚谷 泰司
中村佳代子 橋本 省三 (慶応大・放)
岩永 史朗 半田俊之介 (同・内)

虚血性心疾患もしくはその疑いのある 20 例に、新しい心筋血流製剤 SQ30217 ($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Teboroxime) を投与し、その結果を検討した。

運動負荷・安静時 2 回投与を行い、負荷 Tl, 心臓カテーテル所見と比較したところ、Tl シンチグラフィとの所見の一致率は高く (約 85%) Tl と比べ sensitivity, specificity に有意差はなかった。planar 像では高率で下

壁と肝臓との重なりを認め、5 例では SPECT 像でも重なりがあり、うち 4 例で SPECT 短軸像にて artifact と考えられる肝に接する下壁の欠損が見られ読影上注意を要すると思われた。一方、連続撮像にて、虚血部と健康心筋部との washout の差から虚血を短時間かつ鋭敏に検出できる可能性も示唆されている。

3. 3D display 法による Tc-99m MIBI 心筋シンチグラム

鹿島田明夫 町田喜久雄 本田 憲業
間宮 敏雄 高橋 卓 滝島 輝雄
釜野 剛 村松 正行 井上 優介
(埼玉医大総合医療セ・放)
伴 隆一 (島津製作所)

16 例の陳旧性心筋梗塞患者に対し 3D display 法による Tc-99m MIBI 心筋シンチグラムを施行し、病変部位診断能について Tc-99m MIBI SPECT との比較検討を行った。回転型ガンマカメラにて 64 方向の撮像を行い、断層像は Shepp-Logan filtered back projection 法にて、3D 像は depth-shading 法により再構成された。読影は 4 人の放射線科医の合議により施行された。Tc-99m SPECT および 3D 像の病変部位診断能の sensitivity および specificity に差はなかったが、3D 像は SPECT 像に比し、RI 欠損像の直観的診断が容易であると思われる。3D display 法は左室壁の血流欠損像の診断に有用であることが示唆された。

4. ガリウムシンチグラフィと CA 125 が有用であった悪性腹膜中皮腫の 1 例

方波見卓行 堀内 規 磯部 穂積
中村 芳正 加藤 義郎 高橋 利明
星 賢二 辻野大二郎 斎藤 宣彦
染谷 一彦 (聖マ医大・三内)

症例、69 歳女性、悪心・腹満感を主訴に受診し、腹水を指摘され入院。蛙腹と右側腹部腫瘤を認め、血清・腹水 CA 125 が著明高値、腹水細胞診 Class V, Ga シン

チで腹部全体の集積と増加と胃大弯に沿う異常集積を認めたが、他の画像検査では右腎腫瘍像以外に原発巣と考えられる異常はない。右腎腫瘍生検で腎細胞癌と診断、腹水細胞診所見と一致なく腹腔鏡を施行。Ga シンチ異常集積部を中心に黄白色の小結節が散在し、生検により悪性腹膜中皮腫と診断した。CDDP 腹腔内投与後腹水は消失、臨床経過と一致して CA 125 の低下、Ga シンチ異常集積の消失がえられた。腹膜中皮腫の診断・治療効果判定・経過観察に Ga シンチ、CA 125 が有用と思われた。

5. 骨転移巣の検索にガリウムシンチグラフィが有用であった 1 例

井上 優介 本田 憲業 町田喜久雄
(埼玉医大総合医療セ・放)
百瀬 敏明 小坂 昇 西川 潤一
佐々木康人 (東京大・放)

$^{99m}\text{Tc-MDP}$ を用いた骨シンチグラフィと比べ、ガリウムシンチグラフィは転移性骨腫瘍に対する感受性は劣っているとされる。

われわれは食道癌再発の一例に対して、転移巣検索を目的として、骨シンチとガリウムシンチを、同時期に施行した。CT で示されていた肺転移巣、縦隔リンパ節転移巣のガリウムの取り込みは強くなかったものの、骨シンチで偽陰性を呈した骨転移巣がガリウムシンチでは良好に描出され、骨転移巣の検索にガリウムシンチの方が有用と考えられた。両シンチ所見が乖離した経過をとったことから、ガリウムシンチが骨シンチとは異なる骨変化を反映していることも示唆された。

6. 後腹膜線維症における ^{67}Ga シンチグラフィの検討

西巻 博 石井 勝己 中沢 圭治
依田 一重 池田 俊昭 西山 正吾
片桐 科子 (北里大・放)

今回われわれは、 ^{67}Ga シンチグラフィで興味ある所見を呈した後腹膜線維症 2 例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。2 例ともに開腹生検が施行されており、特発性後腹膜線維症と診断された。 ^{67}Ga シンチグラフィにおいて 2 例ともに腹部大動脈付近に 2 本

の線状の RI 集積 (tramline 型とよぶ) が認められた。文献例をあわせて検討すると tramline 型以外に腹部大動脈付近にびまん性に集積する型 (diffuse 型とよぶ) と骨盤腔に集積する型 (pelvic 型とよぶ) の 3 型に分類できた。tramline 型集積は後腹膜線維症に特徴的な集積パターンと考えられた。

7. $^{131}\text{I-MIBG}$ シンチグラフィにより転移巣が検出された甲状腺髄様癌の 4 症例

橋本 禎介 (都立大塚病院・放)
久保 敦司 塚谷 泰司 中村佳代子
橋本 省三 (慶応大・放)
伊藤 国彦 (伊藤病院)

甲状腺髄様癌の術後面中カルシトニンの上昇を認めた 10 症例に対し、 $^{131}\text{I-MIBG}$ シンチグラフィを施行した。10 例中 4 例では頸部から縦隔に異常集積が認められ、いずれも手術にて転移が証明された。他の 6 例のうち 3 例は真陰性であることが確認されたが、残りの 3 例は経過観察中である。甲状腺髄様癌の術後の再発、転移の局在診断は、CT などでも困難なことが多く、決め手となる画像診断法は従来なかった。 $^{131}\text{I-MIBG}$ シンチグラフィは再発、転移部位の検出に非常に有用であり、術後血中カルシトニンや CEA の上昇がみられた場合には、ルーチン検査として行われることが望ましいと考えられる。

8. 癌治療後も残存する mass に対する、FDG を用いた PET の応用

岡田 淳一 宇野 公一 今関 恵子
久山 順平 佐々木信子 有水 昇
(千葉大・放)

悪性腫瘍の治療後も mass が存在し、その mass 内に悪性細胞が存在するかどうかは临床上問題となることがある。その判断における、 ^{18}F -fluorodeoxyglucose (以下 FDG) を用いた PET の有用性を評価するために、治療後も mass が残存した頸部悪性リンパ腫 5 例を対象に検討を行った。FDG 集積の残存 mass / 正常軟部組織比は 1.76 から 2.68、Distribution absorption ratio (DAR) は 1.76 から 3.92 の間であった。残存 mass を摘出した 1 例では、壊死組織の回りに炎症細胞浸潤が見られたことから、残存 mass への軽度ながらの FDG 集積の一因は、